

あの日、浦戸の島々は『自然の防波堤』となった

「…平安朝の、貞観十一年夏五月二十六日（或は七月十三日とも云う）大地震大海嘯あつて松島湾一带の地に大地変を生じ、此時現在に現る松島の大景勝が出来たといはれて居る。

其の以前は多賀の鹽竈より桃生郡大塚濱まで沿岸傳へに公けの驛路があつて、多賀國府と桃生の柵を結ぶ官道であつたといふ…」

古書が伝える貞観地震・津波と浦戸の歴史。

平成23年3月11日。

あの日、『自然の防波堤』となり、津波から本土地区を守った島々。

島々に暮らす人々は、それゆえに甚大な被害を受けました。



桂島



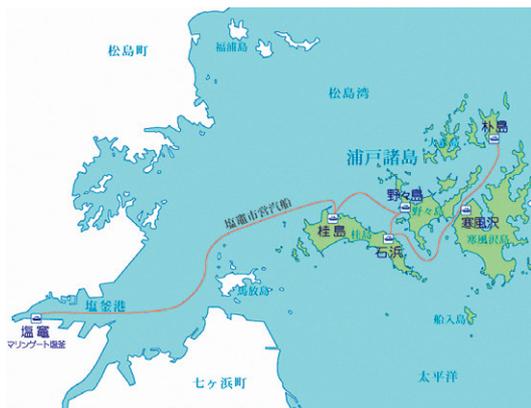
石浜

海に生業を求める浦戸地区は、
『みなとまち塩竈の原点』

桂島、野々島、寒風沢島、朴島の4つの有人島と200を超える無人島からなる浦戸諸島。縄文時代の人々の生活の痕跡である貝塚が舟入島や桂島で見えられ、古くから豊かな海の幸に恵まれた場所であったことを今に伝えます。

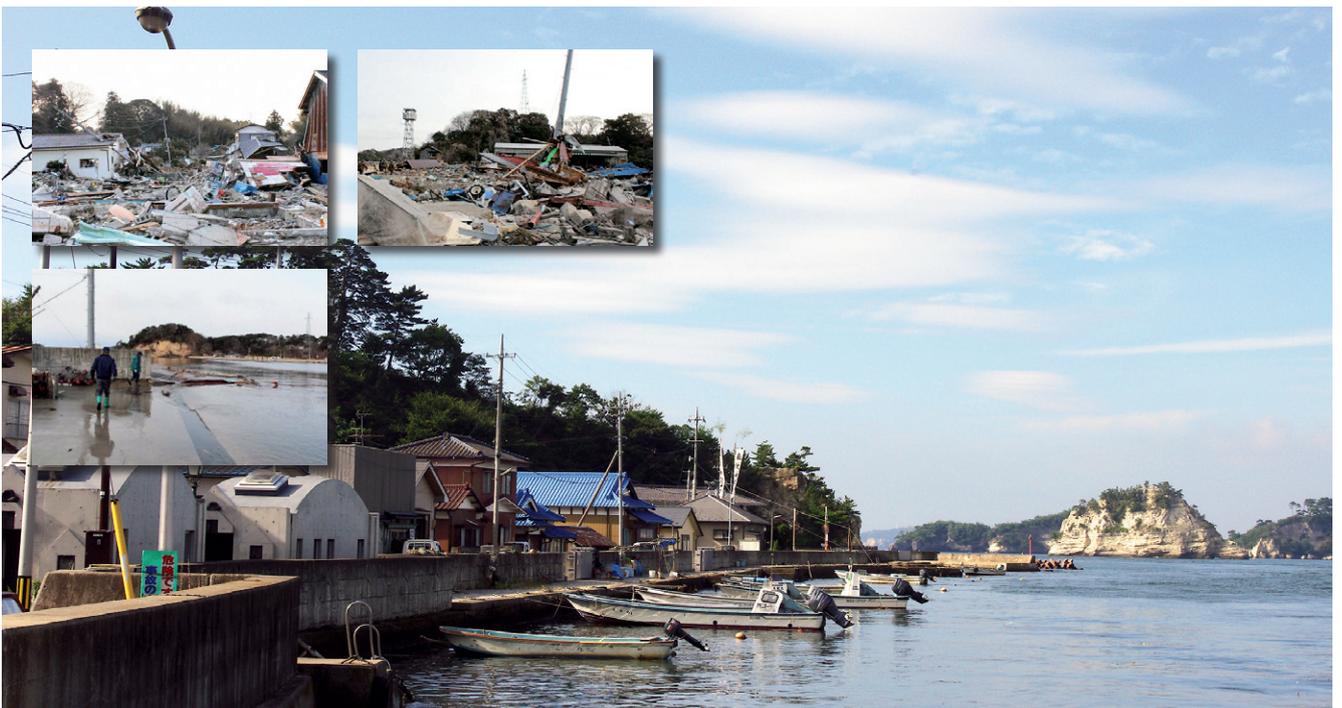
平成23年3月11日、高さ8.5メートルの津波が島々を襲いました。寒風沢島では4名（島内で被災し亡くなった方は3名）の尊い命が奪われ、すべての有人島で住宅や港湾施設、漁業施設、漁船、養殖施設に甚大な被害を受けました。中でも浅海養殖漁業者にとっては、前年のチリ地震津波と2年連続しての被害でした。

人々が海に生業を求め、港や漁業における繁栄の歴史を残して来た浦戸地区は、いわば『みなとまち塩竈の原点』。津波被害からの復旧復興は、塩竈の未来を築くために欠かせない事業であり、歴史の新たな1ページでもあるのです。





野々島



寒風沢島

浦戸4島

	面積	周囲	標高
桂島 (桂島 / 石浜)	0.76km ²	6.8km	61m
野々島	0.56km ²	8.9km	23m
寒風沢	1.45km ²	13.5km	36m
朴島	0.15km ²	2.2km	22m

朴島



時代の記憶・記録 災害を乗り越えて

貞観、永祿、昭和、そして平成。
歴史を振り返ると、何度も津波被害に見舞われていることが分かります。
しかし、人々はそれを乗り越え、歩みを続け、
この地に繁栄を築き上げてきたのでした。

たくましく築いた繁栄の時代。
災害を乗り越えて

浦戸諸島の歴史は古く、縄文時代から人々が生活していたことが確認されています。島の多くの場所から貝塚が発見され、たくさんの土器などが出土し、当時から海の幸に恵まれていたことがうかがえます。

その後も、鎌倉時代は朴島や野々島、江戸時代は幕府の御城米や仙台藩の江戸廻米の港としてにぎわった寒風沢島、幕末から明治時代は榎本艦隊が投錨、ラッコ船によって繁栄した白石廣造氏の邸宅跡がある桂島の石浜と、島ごとに時代が異なる史跡や伝説、昔話が残ります。

その歴史、今に残る文化財の数々は、人々が災害を乗り越え、たくましくこの地に生き、繁栄を築き上げてきたことの証なのです。

震災による浦戸地区の文化財の被害

(「文化の港 シオーム」文化財の被災状況より転載)

- ◎寒風沢造船の碑…土台から外れて後方に転倒。
- ◎十二支方角石…転倒。
- ◎しばり地蔵…転倒。
- ◎化粧地蔵…倒れてはいないが台座とのズレが生じている。
- ◎神明社(寒風沢)…装飾部分一部転落。燈籠は倒壊。
- ◎寒風沢砲台跡の小祠群…転倒。
- ◎白石廣造邸宅跡…外観にはあまり影響がないが、崩落部分などが目立つために補修などにより安全管理に配慮が必要。
- ◎六地蔵(寒風沢)…屋根石が後方に転落。石の配置にずれ。
- ◎延命地蔵菩薩…前方へ転倒。
- ◎チリ地震津波記念碑…転倒。



寒風沢神明社



被害状況・寒風沢神明社

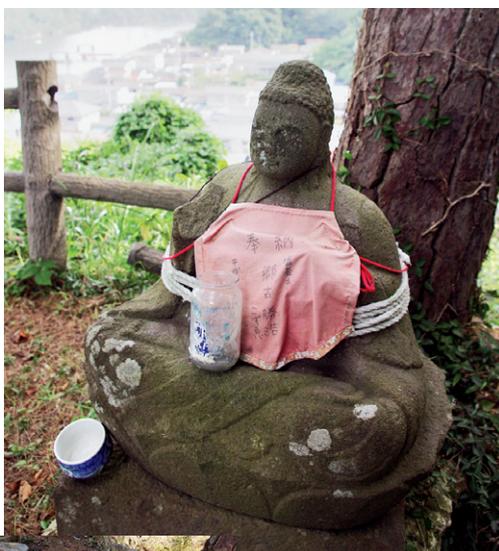


十二支方角石



被害状況
十二支方角石

弘安十年銘供養碑 (孝子の碑)



しばり地蔵



被害状況・しばり地蔵



寒風沢造船の碑

被害状況・寒風沢造船の碑



六地藏



化粧地藏



百万遍供養碑

白石廣造邸跡



被害状況・寒風沢砲台跡の小祠群



被害状況・百万遍供養碑

野々島のボラ



□ 浦戸地区の歴史年表 (参考・塩竈市浦戸諸島ホームページ)

- 縄文 前期 塩竈市浦戸船入貝塚
- 縄文 中期 塩竈市浦戸桂島貝塚
- 縄文 後晚期 浦戸諸島三十数カ所貝塚
- 八六九(貞観11)年 陸奥に大地震あり(貞観の三陸沖地震津波)
- 一二二(承久3)年 承久の乱 内海長者野々島に逃避住したりといふ
- 一二八七(弘安10)年 浦戸朴島に弘安十年銘供養碑(孝子の碑)建つ
- 一五五九(永禄2)年 浦戸寒風沢村を鹿倉村と称し、大津波あり七十
余戸流出
- 一六三二(寛永9)年 仙台藩の廻米はじまる、寒風沢港開港
- 一七九三(寛政5)年 若宮丸漂流ロシア領に漂着(文化2年1806年
世界一周して津太夫・左平ほか帰国)
- 一八五七(安政4)年 仙台藩軍艦開成丸寒風沢において進水、各藩の
大名参列す
- 一八六七(慶応3)年 仙台藩寒風沢日和山南端 船入島・石浜崎に砲台
を据え海岸防備に当る
- 一八六八(慶応4)年 榎本艦隊、投錨
奥羽鎮撫総督九条道孝率いる薩長筑藩兵寒風沢
に上陸
- 一八六九(明治2)年 政府海軍甲鉄艦外8隻寒風沢港に入港、翌日出航
- 一八七二(明治5)年 埼玉県の人白石廣造、石浜に廻漕店を開く
- 一八八六(明治19)年 「松島湾五ヶ村漁業組合」設立
- 一八八九(明治22)年 寒風沢・野々島村・石浜村・桂島村は塩竈村より
分離、浦戸村として独立
- 一九六(明治29)年 明治三陸地震(6月15日)
白石廣造ラッコ猟を始め
- 一九〇〇(明治33)年 宮城県北部地震
- 一九〇六(明治39)年 桂島寒風沢に鮎田式旋網漁業を始め
- 一九二二(大正10)年 野々島、桂島に底曳船漁業開始
- 一九三三(昭和8)年 三陸地震(3月3日)
- 一九四四(昭和19)年 個人経営の島内巡航船塩竈市に買収され、塩竈
市交通部発足(8月20日)
- 一九五〇(昭和25)年 浦戸村を塩竈市の区域に編入、塩竈市役所浦戸
支所を野々島字河岸に開設(4月1日)
- 一九六〇(昭和35)年 チリ地震津波(5月24日)
- 一九六五(昭和40)年 浦戸地区に簡易水道を建設(10月1日)
- 一九七一(昭和46)年 簡易水道を上水道に編入(10月1日)
- 一九七八(昭和53)年 宮城県沖地震(6月12日)
- 一九八二(昭和57)年 浦戸諸島開発総合センター開設(7月23日)
- 二〇〇五(平成17)年 浦戸第二小学校を浦戸中学校に併校(4月1日)
野々島馬越に移転
- 二〇一〇(平成22)年 チリ地震津波(2月28日)
- 二〇一一(平成23)年 東日本大震災(3月11日)

な恵みの中で—

の歳時記

自然の中に暮らし、
や風習を伝えてきた浦戸地区。
「島時間」で過ぎていました。
復興事業、住民の努力によって、
取り戻しつつあります。



野々島の桜

豊穡の海と黄金色の実り。
取り戻しつつあるかつての暮らし。

浦戸諸島の歴史は古く、縄文時代から人々が生活していた季節ごとに花々が彩る浦戸の島々は、松島湾に浮かぶ植物園であり、その周囲は豊穡の海。潮の循環が良好な松島湾内では種カキ、ノリなどの養殖漁業が盛んです。また、季節に応じて、シラウオ漁やアワビ・ウニ漁、アナゴ漁も行われます。震災では養殖施設が流出、加工施設が被災するなど、甚大な被害を受けましたが、国内外からの温かい支援と漁業者の自助努力により、元

再開された稲作



春

3月

《伝統行事・風習》

- 3日…●彼岸
●観音講<野々島>
- 12日…●ひなの節句
●水神様<朴島>

《旬の味覚・見どころ・イベント》

- 梅の見頃(3月)
<石浜・寒風沢・朴島>
- 椿のトンネル見頃(3月下旬~5月上旬)
<野々島>

4月

《伝統行事・風習》

- 4日…●神明社春祭り
<寒風沢>
- 8日…●灌仏会
- 中旬…●施餓鬼
- 18日…●お観音様
<寒風沢>

《旬の味覚・見どころ・イベント》

- ヒガンフグ漁(4月)
- ウミネコの子育て(4~7月)
<朴木島 他>
- 朴島の菜の花畑の見頃
(4月中旬~5月中旬)<朴島>
- 桜の見頃(4月中旬)
<野々島>
- 春のウォーキングシーズン

5月

《伝統行事・風習》

- 5日…●端午の節句
- 12日…●女性のおがみっこ
<石浜>

《旬の味覚・見どころ・イベント》

- 浦戸米の田植え(5月)
<寒風沢>
- ハマヒルガオの見頃(5~6月)
<桂島・野々島・寒風沢>
- ハマエンドウの見頃(5~7月)
<桂島・野々島・寒風沢>
- アオスジアゲハの見頃(5~10月)
<浦戸諸島全域>
- ギンヤンマの見頃(5~10月)
<浦戸諸島全域>

夏

6月

《伝統行事・風習》

- 6月上旬…
●「竜神様」[船入り]弁才天
<寒風沢>
- 14日…●虫送り
●竹駒講
<朴島>
- 12日…●ひなの節句
●水神様
<朴島>

《旬の味覚・見どころ・イベント》

- アワビ・ウニ漁(6~7月)
- 夜光虫の見頃(6~10月)

7月

《伝統行事・風習》

- 7月中旬~8月中旬…
●海開き<桂島>
- 海の日…
●塩竈みなと祭
海上渡御

《旬の味覚・見どころ・イベント》

- アナゴ漁(7~12月)
- ハマナスの見頃(7月)
<桂島・寒風沢>
- ラベンダーの見頃(7月中旬~8月中旬)
<野々島>
- 海水浴シーズン(7月中旬~8月中旬)
<桂島>

8月

《伝統行事・風習》

- 6~8日…●七夕
- 13~15日…●盆
- 29日…●灯籠流し盆
<寒風沢>

《旬の味覚・見どころ・イベント》

- 桂島夏祭り花火大会
- 野々島盆踊り花火大会

秋

9月

《伝統行事・風習》

《旬の味覚・見どころ・イベント》

- 15日…●石浜神社秋まつり <石浜>
●お名月さま
- 16日…●秋まつり<朴島>
●九月節句
●神明社秋祭<寒風沢>
●秋まつり<野々島>
- 浦戸米の稲刈り(9月)<寒風沢>
●湾内に林立する海苔養殖の竹支柱の風景(9~5月)<湾内>
- ハゼ釣り(9~12月)<湾内>
●秋のウォーキングシーズン
●寒風沢神明社秋祭(中旬)<寒風沢>

10月

《伝統行事・風習》

《旬の味覚・見どころ・イベント》

- 1日…●お刈り上げの朔
- 8日…●灌仏会
中旬…●施餓鬼
- 18日…●お観音様<寒風沢>
第2日曜…●熊野神社例大祭
- 牡蠣出荷(10~2月)
- 海苔出荷(10~3月)
- ハマギクの見頃(10月~11月)
<桂島・野々島・寒風沢>

11月

《伝統行事・風習》

《旬の味覚・見どころ・イベント》

- 8日…●恵比寿講
- かきまつり in 桂島 <中旬>
- 牡蠣むき・海苔すき体験イベント(11~12月)

冬

12月

《伝統行事・風習》

- 1日…●水こぼしの朔
- 10日…●大黒の妻迎え
●煤払い
●冬至
- 31日…●歳とり

1月

《伝統行事・風習》

《旬の味覚・見どころ・イベント》

- 元日…●元朝詣り
- 2日…●年始回り
- 6日…●船乗り初め
●若木迎え
- 7日…●七草粥
●どんと祭
- 11日…●農事初め
- 12日…●山の神講<野々島>
- 14日…●竹駒講<朴島>
●女の歳とり
●チャセゴ
- 15日…●アカツキ粥
●松納め
- 16日…●お墓参り
- 17日…●観音講<野々島>
●鳥追い
- ワカメ出荷(1~3月)
- 雪景色の浦戸諸島(降雪時)

2月

《伝統行事・風習》

《旬の味覚・見どころ・イベント》

- 3日…●淨極庵 観音講 <石浜・朴島>
●節分の豆まき
- 16日…●庚申講<野々島>
●初午
●春まつり<朴島>
- シラウオ漁(2月下旬~4月上旬)
- アカモク出荷(2~4月)

—海と地の豊か

浦戸地区

海と地という恵まれた島ならではの独特の伝統行事
震災前、1年はゆったりとした
そして、今、温かい支援と
かつての日々を



ハマナス

の状況に近づきつつあります。また、津波で冠水し、さらには地盤沈下の被害を受けた寒風沢島の水田も、黄金色の実りの地に再び戻りました。

各島各地区に鎮座する神々は、住民の心の拠り所であり、祭礼は大切な行事です。寒風沢島の神明社では、平成26年秋、震災後に途絶えていた秋祭が挙行され、神輿が4年振りに島内を練り歩きました。浦戸地区の住民は、かつての暮らしを取り戻しつつあります。



震災後に完成した「乾海苔協業化施設」(桂島)と「共同カキ処理場」(寒風沢島)



懐かしき風景 — 震災前の浦戸地区 —

季節の花咲き、潮風そよぐ。
集落のあちこちから聞こえる、人々の笑い声。
ゆっくりと過ぎていった時間。
懐かしき風景は、数々の思い出とともに記憶の中に。
震災前の浦戸地区の風景と暮らしの一幕を市が撮影した写真で振り返ります。



平成 6 年



平成 22 年



平成 3 年

桂島

野々島

平成 22 年



平成 16 年



平成 18 年



平成 16 年



寒風沢島



平成 22 年



昭和 63 年



平成 4 年



平成 4 年

朴島

平成 22 年



平成 22 年



石浜

平成 22 年



浦戸の明日

（復旧・復興・未来）

縄文人の生活の痕跡が残る島々で、人々は災害を乗り越え、海に生業を求め、たくましくこの地に生き、何度も繁栄を築き上げてきました。浦戸地区は、みなどまち塩竈の原点。その課題は塩竈の課題であり、その明日は塩竈の明日でもあります。



野々島に襲来した津波

小さな「コミュニティ」区と消防団、軽トラックのピストン輸送

大津波警報を伝える防災行政無線はやがて聞こえなくなり、ラジオが唯一の情報源となった桂島地区。ラジオから流れる「予想される高さ10メートル」という津波の襲来が迫る中、消防団や地区役員の人々は冷静に住民の避難誘導に当たりました。警察署や派出所、消防署の無い浦戸で唯一の防災機関である塩竈市浦戸消防団は、2分団5部14班67名、うち桂島を担当する第2分団は26名（※人数はいずれも震災時）。しかし、震災発生は平日の日中だったことから、団員の多くは島外に勤務しているため不在でした。限られた人数の団員に地区役員、その他の住民が加わった避難誘導だったのです。区長の内海余蔵さんは、次のように当時を振り返ります。

「地震の後すぐに消防団の詰所に向かったんです。警報や注意報が出たら詰所に集合。は地区の決まりごとです。詰所までの道では、石塀の倒壊

などがありました。が、家屋に大きな被害は出ていないように見えました。詰所に関係者が集まったところで、急ぎ住民を高台にある指定避難所（旧浦戸第二小学校）へ誘導しようとなりました。その時、優先したのが高齢者と要支援者でした。どこの世帯に高齢者や要支援者がいるのか、地区の住民なら誰しも分かっていたから、安否確認も兼ねてそれぞれ手分けして向かいました。避難させる際、緊急を要することなので、足の不自由な方は軽トラックの荷台に乗せて運びました。全員が避難所に到着するまでの時間は約30分ぐらいだったと思います」

軽トラックを使用した避難は、寒風沢島でも同様でした。寒風沢地区の島津功区長（震災時は副区長）も「防潮堤の扉を閉め、家族を避難させた後は、高台にある指定避難所（旧浦戸第一小学校）まで、高齢者や足腰の悪い人を乗せてのピストン輸送だった」と語ります。それは、刺し網漁に従事する島の男性10数名が旅行で当日不在という悪条件の中での避難誘導でした。

軽トラックは、道幅の狭い島で重宝される輸送手段ですが、それを利用した避難を迅速かつ的確に行うことができたのは区という顔の分かる人間関係があったからに他なりません。区は、高齢者だけの世帯、高齢者が一人で暮らす世帯、身体の不自由な方のいる世帯など、どこに、誰が生活しているのかが分か



熊野神社



浦戸第二小学校・浦戸中学校



樫のトンネル

り、救護を必要とする状況にあるかまで容易に想像できる、浦戸ならではの小さなコミュニティなのです。

住民の命を守った 浦戸ならではの諸要因

野々島での避難は、命の危険と隣り合わせでした。指定避難所は浦戸第二小学校・浦戸中学校ですが、集落から少し離れていることに加えて、津波が押し寄せるとであろう海岸に近い場所を通らなければなりません。住民の大半は熊野神社の境内を避難先としました。当日、島にいた消防団員はわずか2名。区長ほかの地区役員も加わった避難誘導でした。区長の鈴木虎男さんは、次のように振り返ります。

「ここも防災行政無線が聞こえなくなりました。消防団第一分団（野々島担当）の班長さんが、家々を回ってはガスの元栓を閉めて避難することを呼び掛けましたから、私は集まってくる方々を高台にある熊野神社へと誘導しました。この島では、全住民で一つの家族のような関係なんです。あつ今日は誰れさんが本土に出掛けたなとか分かるんですよ。ですから、避難人数や安否はすぐに確認できました。みんなが集まると雪が降ってきたのですが、屋外では寒さをしのげません。そこで、高台にある学校（浦戸第二小学校・浦戸中学校）へ移動することを

決めたんです。避難してきた住民の中には車椅子の方もいました。その方をおんぶして学校を目指しました。

熊野神社から学校へは、高い所を選んで歩くしかありません。尾根づたいの道、樫のトンネルのあるハイキングコースを通りました。津波の襲来はその途中のことでした。波は電線の高さまでありましたから、10メートルぐらいだつたでしょうか。ゴォーという轟音がとても不気味に感じられました。住宅をはじめ、さまざまな施設に大きな被害が出ることは明らかでしたし、この時、避難所生活が長期間になることを覚悟しましたね。

学校までもう少しの場所、夜泣き地藏と学校の間の道ですが、そこは低くなっているため、津波が乗り越えていました。しばらく立ち止まって波の様子をうかがい、大丈夫と判断できた時に急いで通過しました。みんな命がけ。学校に到着したのは16時過ぎでした」

決死の避難を体験した住民のほか、浦戸諸島開発総合センター（ブルーセンター）の職員は、2階に上がり津波の難を逃れました。また、朴島の住民は、さん橋に集合した後、付近を航行訓練中だった塩釜消防署の消防艇の乗員とともに高台にある神明社の境内へ避難しました。しかし、社務所は地震で損壊。翌日からは空き住宅を借り、避難所として12日間使用しました。

震災で亡くなった方は浦戸4島で3



平成25年8月に新設された消防団詰所（野々島）

名。人的被害を小さく止めることができたのは、区というコミュニティ、日頃から訓練を重ねていた消防団や区をまとめる役員の行動、多くの住民にある昭和35年と震災前年のチリ地震津波の経験と避難の重要性に対する意識（歴史と経験に基づく住民の備え）、津波を想定し高台に設けられていた避難所（地形）、身近にある軽トラック（生活環境）など、浦戸ならではの諸要因があつてのことでした。

なお、野々島と寒風沢島の消防団詰所（器具置場）は津波で全壊。どちらも平成25年8月に移転、新築されました。また、同報系防災行政無線はアナログ方式からデジタル方式へ変更、バッテリーも長時間対応とするなど震災後に改良が図られています。

ライフラインが寸断され、長期にわたった避難所生活

浦戸地区内に開設された避難所は、崎神社下の民宿阿部（震災後一週間）・旧浦戸第二小学校（桂島）、浦戸第二小学校・浦戸中学校（野々島）、旧浦戸第一小学校（寒風沢島）、借り上げた民家（朴島）の4カ所。そのうち津波の被害が小さかった朴島は12日間で閉鎖されましたが、その他は住宅やライフラインの被害が大きく、各島にプレハブ応急仮設住宅が整備され、入居開始となるまで長期にわたって避難所生活を続けることとなりました。

なお、比較的短期間で閉鎖となった朴島の区長の尾形孝雄さんは、津波被害が小さかった理由として地形的要因を挙げています。

「津波の被害が小さかったのは、宮戸島との間の鰐ヶ淵水道が狭いため、外海から波が入って来にくかったからでしょう。昭和35年のチリ地震津波の時も大きな被害は出ませんでした。ですが、その後には作られた防潮堤の一部が今度の地震で倒れ、そこから津波が浸水したんです。地盤が沈下したため、住宅地内にまで海水が上がってくるようになりました。」

現在、「浦戸地区」と一括して呼ばれることが多い4島ですが、江戸時代には、桂島村、石浜村、野々島村（朴島は野々島の一部の扱い）、寒風沢村と独立した村でした。そうした歴史的背景があ

ることから、島々の間の距離は近いものの、住民はそれぞれの「区」という共同体でのまとまりを意識して暮らしています。また、海によって隔てられ、島々の往来に支障があることも考慮され、収容者数が減少しても避難所の統合は行われませんでした。



旧浦戸第一小学校



旧浦戸第二小学校

■プレハブ応急仮設住宅の入居開始日

名称	建設戸数	入居開始日
浦戸桂島地区	21	平成 23 年 6 月 25 日
浦戸野々島地区	15	平成 23 年 7 月 9 日
浦戸寒風沢地区	12	平成 23 年 6 月 30 日
合計	48	—

全住民による共同生活を支えた食料や燃料備蓄の習慣

浦戸地区では、ほとんどの住宅（世帯）が何らかの津波被害を受けました。被害を受けなかった住宅もライフラインの復旧に時間を要したため、そこで生活することが困難な状況となりました。そのため、避難所生活は、ほぼ全住民による共同生活でした。

震災直後、本土地区の避難所では、想定以上の人々を収容することとなり、食料や物資が不足しました。海に隔てられ、電話も通じず、行政や民間の支援も遅れ、さらにはほぼ全住民が避難所に収容された浦戸地区。しかし、驚くことに食料や燃料の不足は生じませんでした。

本土地区との往来が天候に左右される浦戸地区では、家庭で食料や燃料を常時備蓄しておく習慣がありました。それぞれに大型の冷凍庫や食料ストッカーがあり、燃料は200リットルのドラム缶で購入し、備蓄していたのです。また、ガスはプロパンガスでした。流されずにあったそれらを持ち寄り、所有者から購入して食事や暖を取ることができました。漁業に従事する家庭には発電機やポンプ、大型の樽などの資機材もありました。雑用水には井戸水や学校のプールの水が利用できました。ただし、飲料水の不足は深刻で、15日には島民の有志が無数のがれきが漂う湾内に船を出し、窮状を市に訴えました。

■ライフラインの復旧

- ◎電気 4月25日（野々島）
4月30日（寒風沢島）
- ◎水道 3月25日（桂島の一部）
3月28日（桂島全域）
4月20日（野々島）
4月29日（寒風沢島）
5月4日（朴島）

明日への希望を与えてくれた自衛隊の救援・支援

避難所生活を振り返る時、全地区の区長さんが口を揃えるのが自衛隊による救援・支援への感謝です。枯渴しつづっていた飲料水を届けたのも自衛隊でした。ヘリコプターや艦船による物資の輸送、がれきの撤去、入浴など、幅広い支援を受けました。

中でも多くの島民にとって印象に残る思い出となったのは、手足を洗うことができず、不快感がストレスになり始めた頃に受けた、沖合に停泊した大型艦船での入浴支援でした。大型艦船までの移動に使用されたホバークラフトへの乗船と、久しぶりの入浴の快適さ。それは避難所生活を忘れさせるひと時でした。さらには、入浴している間、隊員の方に衣類を洗濯してもらったこともあったといいます。陸・海・空、それぞれの自衛隊から受けた力強く、時にきめ細やかで温かい支援の数々は、失意の中にあつた島民を励まし、明日への希望を与えてくれたのでした。

**協力し合い、知恵を出し合い、
お互いを支え合う日々**

地区のほぼ全住民を収容した避難所。その開設当初を3人の区長さんは次のように振り返ります。

「初めてのことで、自宅を失って茫然としている人もいます。そして余震も…。11日の晩は、そうしたみんな



自衛隊の支援活動

の不安をどのようにして取り除くかを考えていました」（桂島・内海区長）

「廃校から10年以上を経過していたので、建物の痛みがひどかったんですね。そのため、炊事などは屋外に設置したテント内で行わなければなりませんでした」（寒風沢・島津区長）

「最初の3日間は学校の先生方と一緒に。先生方も家族や自宅が心配だったので、先生方もお世話をしていた。大変感謝しています」（野々島・鈴木区長）

最長で7月上旬まで続いた避難所生活は、住民同士が協力し合い、知恵を出し合い、お互いを支え合う日々でした。支援が届かなかった震災直後は、男性を中心としたメンバーが、女性たちは炊事を担当。200人を超える住民の避難所となった旧浦戸第二小学校では、準備しなければならぬ量の多さから、一日一食（昼食）はパン食とすることになったそうです（内海区長談）。島津区長も「炊事は給食センターのようだった」といいます。寒さが厳しかった夜は、誰かのアイデアによる、ペットボトルの湯たんぽ、やドラム缶の風呂が喜ばれました。ふさぎ込んでしまいがちな人々の心と身体を朝から元気にしようと、全員によるラジオ体操を実施したところ、臥せていることが多かった高齢者が起き上がった。参加するという効果もあったそうです（鈴木区長談）。また、桜の時期

には、お花見も行われました。一方、問題になったのは大人数が利用したトイレでした。その処理方法は課題となりました。



避難所の様子（旧浦戸第二小学校）



平成23年3月16日、浦戸中学校・浦戸第二小学校避難所（野々島）にて

**災害公営住宅の完成で
もう一度島に**

震災で住宅に被害を受けたことをきっかけに、本土地区の仮設住宅や民間賃貸住宅への入居、あるいは親族との同居によって、島から転出することになった住民は少なくありません。事実、震災前589

人（平成23年2月末）だった浦戸地区（4島5地区）の人口は、震災後441人（平成25年10月末）と大幅に減少しました。区の仲間、隣同士、同級生、同じ生業：など、親しくしていた人との別れは、お互いに辛く悲しいものでした。その心情は、桂島の内海和江さんが島を離れていく人々に贈る言葉として綴った詩「わせねでや」にも表れています（※112ページ参照）。

災害公営住宅の完成が遅れば遅れるほど、出て行く人が増える。一度島を出たら、二度と戻って来ない。と5地区の区長さんは言います。そして、わざわざかではあるが、戻る可能性があるとするれば、災害公営住宅だ。と期待を込めます。災害公営住宅への入居、親との同居のためにもう一度島に戻って来る人々がいることを信じ、また、住民の生活再建を願って、区長さんたちは完成する日を待っています。



災害公営住宅着工式（平成26年6月28日）

船の重要性。 新たな輸送・交通手段の創出

「市営汽船の運航再開を一日でも早く。それを訴えるため、15日に市役所へ行っただけです」。石浜区長の高橋栄悦さんは、浦戸地区と本土地区を結ぶ生命線である船の重要性を語ります。

「島の人々にとって、通学や通勤の手段である市営汽船の運航再開が復旧・復興の始まりなんです。被害を受けた上、学校にも職場にも行けないのでは、島を出ることを選ぶしかない。市には運航再開を最優先にお願いします。3月26日、関係機関の方々の頑張りによって、石浜まで運航再開となりました。あの日から人と物の動きが現れ、明るい兆しが見えてきたんです」



浦戸フェリー「なの はなまる」

震災から約1年後、市営汽船のダイヤが震災前に戻った平成24年4月、浦戸貨物フェリー「なの はなまる」が就航しました。塩釜ロータリークラブが中心となった「宮城県塩釜市浦戸諸島貨物輸送のための19屯型フェリーボート支援プロジェクト」からNPO浦戸フェリーに寄贈された船は、浦戸地区と塩竈を結ぶ初めてのフェリーです。浦戸地区にふさわしい船名は、浦戸中学校の生徒の命名。4トントラックなら2台、軽乗用車であれば8台運ぶことができる新たな海上輸送手段は、復興に大きく貢献しています。

浦戸地区と本土地区を結ぶ新航路については、島の住民自身も行動を起こしました。浦戸5地区の区長さんほかをメンバーとする「浦戸自主航路運営協議会」では、平成26年9月から自主運航船「SAWAYAKA（さわやか）」（4・8トン、13人乗り）を就航させました。さわやか福祉財団からの寄付を受けて船を購入、実現したものです。島の漁業者が交代で操縦し、市営汽船の最終便後の夜間などに運航。帰宅が遅くなる住民の利用ニーズに応えています。

漁業者の自助努力の一環。 「うらと海の子再生プロジェクト」

浦戸地区の漁業者の復興に向けた歩みの一つが「うらと海の子再生プロジェクト」。「行政・支援団体からの義援金や寄付金を待つばかりでなく、私たち漁業従

事者自らの頭で考え、自らの手で操業再開の糸口を掴み、自らの足で歩んでいくとする自助努力の一環」（※一般社団法人うらと海の子再生プロジェクト設立趣意書より）としての活動です。そのスタートは、震災からわずか1カ月後のことでした。

1万円の支援金を募る「うらと海の子一口オーナー制度」は、支援金の半分以上を漁業資材・設備の購入や修繕費にあて、残りの半分を生産者・漁業者の直接的な収入となるよう地元ノリや牡蠣などの海産物を仕入れ、支援いただいた方々へ復興の証、御礼として届けるもの。募集締切の平成23年6月30日までに約1億8600万円も集まり、漁業者を物心両面で支援しました。

同プロジェクトでは、平成26年、浜を越えての復興を目指した販売会社「株式会社海の子Net」を設立し、オンラインショップをオープン。さらには、漁業後継者不足の解決などを目的とした「海の子サポーター」（201万円）の募集を開始しました。漁業者自ら立ち上がり、と始めた活動は、着実にフィールドを広げています。

海外からの温かい支援も 漁業の再建を後押し

海外からも震災直後から支援の手が差し伸べられました。その一つがアメリカに本部のあるNGOオペレーション・ブレッシング・インターナショナル（以下、

OB）からの支援でした。OBは、災害救助や医療扶助、飢餓救援などで苦しむ世界中の人々に奉仕する団体です。国内外のスタッフからなる支援体制は、迅速かつ機動的、専門的であり、何より被災者の立場を熟知したものでした。

支援は3月15日から始まりました。避難所へは飲料水や食料、また、被災によってメガネを紛失あるいは破損した方々を対象とした無料でのメガネ製作、子どもたちへの自転車など、物心両面から心配りが行き届いた支援をいただきました。浦戸の漁協や漁業者へはパソコンやプリンター、発電機、刺し網や養殖用資材ほかの漁具、和船など多大な支援をいただきました。それらは、再建を諦めかけていた浦戸の漁業者を力づけ、将来に希望を抱かせるものでした。そうした温かい支援に対して、市では感謝状を贈りました。



浦戸支所へパソコンを寄贈



「みんなの白菜プロジェクト」

復興に向けてともに歩む。 学生たちと島の住民の交流

学生からの支援は出会いの場、交流の場であり、島の住民にとってうれしいものでした。青山学院大学の学生団体「青山学院大学ボランティアステーション」との交流もその一つです。同団体の学生ボランティアは被災地支援の一環として平成24年8月に訪れ、浦戸地区では環境支援（除草作業・海岸清掃）、経済復興支援（養殖作業、花火大会の手伝い）、本土地区でも教育支援（サマースクール・ウィンタースクール）、福祉支援（介護老人保健施設などの訪問）ほかの活動を行い、島の住民、本土地区の住民や子どもたちとの交流を重ねました。

こうした活動を一過性のものとせず、長く幅広く交流を続けていくため、平成

26年2月、市と青山学院大学との間で、「相互の連携・協力により塩竈市の復興に向けた地域課題の解決及び地域の活性化並びに青山学院大学の人材育成及び研究の発展に寄与すること」を目的とした「連携協力に関する協定」を締結しました。平成26年8月9日から9月14日までの期間に約100人の学生が訪れ、活動しました。平成27年度からスタートする「浦戸小・中一貫校」では、特色ある取組の一つとしてインターネット電話サービスのスカイプを利用した青山学院大学の留学生との「英会話交流」を予定しています。市では、今後も協定の下、より幅広い交流を進めます。

明成高校調理科（仙台市）の生徒や卒業生らを中心とする地域活動グループ「リゾンキッチン」では、「みんなの白菜プロジェクト」の一環として、野々島の畑での「白菜の採種文化の保存活動」に取り組んでいます。

山形大学では、「山形大学震災復興ボランティアチーム」の学生たちが支援に訪れ、「山形大学浦戸諸島観光再生プロジェクト」の学生たちが「浦戸諸島桂島観光復興支援ツアー」を企画、実施しました。平成26年7月、4年ぶりにオープンした桂島海水浴場の海岸清掃を手伝ったのも、山形大学の学生たちでした。

東北大学大学院生命科学研究所生態適応グローバルCOEを中心とした「東北グリーン復興」では、「食歩学守in浦戸諸島」を掲げ、エコウォークのコースを住民とともに協議、さらには、島の味、

地域資源を活用した商品の開発を検討するなど活動を行っています。他にも数多くの学校の学生が支援に訪れ、島の住民を元気づけ、ともに復興に向けて歩んでいます。



青山学院大学ボランティア・ステーション活動報告会 in 塩竈



青山学院大学ボランティア・ステーション学生さんたち

水産業、定住、観光の課題。 浦戸の明日は、塩竈の明日

「塩竈市震災復興計画」では、浦戸地区の復興の方向性を次のように定め、さまざまな事業に取り組むこととしました。

近接の高台移転等により、住み慣れた地域で安全・安心した生活を送れるようになります。特に移転にあたってはコミュニティ単位で移転を図り、医療・福祉環境の充実に努めます。また、避難路の整備やライフラインを強化するなど、防災機能の向上を図り、安心して住み続けられる生活環境の形成に努めます。

浅海養殖漁業については、漁業環境の復興にあわせた既存防潮機能の強化や、漁業施設及び共同利用施設などの早期復旧を図ります。

また、観光施設を早期に復旧するとともに、県による農地海岸の復旧とあわせ、市内唯一の水田の復元を図り、グリーンツーリズムやエコツーリズムなど島の営み自体が観光資源となるような景観形成を図ります。

■具体的な取組 【主な事業】

- ・ 災害公営住宅整備事業
- ・ 防災集団移転促進事業
- ・ 漁業集落防災機能強化事業
- ・ 漁港施設災害復旧事業
- ・ 水産業共同利用施設復興整備事業

浦戸地区の産業の柱である水産業では、水産業共同利用施設復旧整備事業により、平成24年10月、カキ共同処理施設（寒風沢島）および乾海苔共同加工施設が相次いで完成。宮城県漁業協同組合塩釜市浦戸支所と浦戸東部支所、各漁業者の努力により、震災前の状況に戻りつつあります。しかし、現状、多くの住民は将来に希望を持っていません。

平成26年夏、市では浦戸地区の宅地権者（不在地主）と住民を対象に、現在と今後の生活設計、地区の将来像などについてのアンケートを実施しました。その結果を見ると、「生業を担う方はいらっしゃいますか」の問いには、47パーセントが「担い手はいない」と回答。また、「生業の10年後」については、79パーセントが「今より悪い」、地区の10年後についても63パーセントが「今より悪い」と回答しています。

市では、平成26年度浦戸地区の定住促進施策として「浦戸ステイステーション事業」に着手しました。それは、漁業者を育成する施設、新たな短期滞在者を収容する施設と、その仕組みの整備です。また、同年度内にはワークショップを開催して住民の意向や地区の特性、課題を踏まえながら「集落ビジョン」をまとめ、定住促進のための新たな計画に反映することを予定しています。

一方、新たな研修、観光、交流策を検討する試みの一つとして、平成26年10月5日「浦戸諸島・復興エコツーリズムくららのウラガワをのぞこう！」交

流体験モニターツアーを実施しました。これは、大型観光船や市営汽船からでは見ることができない島々の景観（ウラガワ）を、漁業者が普段使用している、だんべっこ（船外機船）に乗って楽しむツアーです。今回はモニターツアーとして、浦戸諸島でボランティア活動に取り組み団体の方を対象に、参加を募りました。今後は、浦戸の体験観光プログラムとして実施できるよう、整備を進めます。

また、文科省東北復興プロジェクトにより、東京大学生産技術研究所が平成24年度から市と協力して開発を進めてきた「潮流発電装置」が、平成26年



「浦戸諸島・復興エコツーリズムくららのウラガワをのぞこう！」交流体験モニターツアー

11月に寒風沢島の旧さん橋跡に設置されました。平成28年度まで発電した電力は地元漁協に供給、クリーンなエネルギーに電力を利用する潮流発電実験は国内初となります。なお、装置の組立は市内の東北ドック鉄工が担当しました。新しいエネルギーの在り方を探る試みであるとともに、地元企業への技術移転など、復興を牽引する新ビジネスの可能性も秘めています。

「人が減り、高齢化が進んでいく。いいところなのに、どうしてだろう」

「住民が元気になることが一番。にぎやかさが戻ってくれば…」

「2年で仮設から出られると思ったら…」

「災害公営住宅が待ち遠しい」

「もっと船の便がよくなれば…」

「（事業が）遅れば遅れるほど不安になる」



潮流発電装置



平成26年夏、4年ぶりにオープンした桂島海水浴場

さまざまな事業が進む中、5地区の区長さんそれぞれが抱く不安。住民を、そして地域を生き生きとさせる今後の復興事業に寄せる期待。そして何よりも区長さん全員が口を揃えるのは地区への愛着でした。

「浦戸はいいところだ」と。

浦戸地区は、みなとまち塩竈の原点。その課題は塩竈の課題であり、その明日は塩竈の明日でもあるのです。

■浦戸地区復旧・復興事業の歩み

年	月日	漁業集落防災機能強化事業	漁港施設機能強化事業	防災集団移転促進事業	小規模住宅地区改良事業	災害公営住宅整備事業	その他の事業
H24	3月2日	第1回復興交付金事業計画において事業採択(桂島・石浜・野々島・寒風沢地区)	第1回復興交付金事業計画において事業採択(野々島・寒風沢地区)		第1回復興交付金事業計画において事業採択(朴島地区)		
	3月12日	事業承認	事業承認				
	5月1日	測量調査着手(桂島・石浜・野々島・寒風沢地区)					
	5月25日					第2回復興交付金事業計画において事業採択(桂島・野々島・寒風沢地区)	
	6月27日 29日	住民説明会(桂島・野々島・寒風沢地区)					
	8月31日						寒風沢漁港離岸堤・馬越浮棧橋完成(災害復旧)
	10月9日			「東日本大震災の復興事業による建設土の利用に関する協定」調印式(七ヶ浜町)			
	10月16日 19日 22日	住民説明会(桂島・石浜・野々島・寒風沢地区)					
	11月2日			事業承認(大臣同意)			
	11月27日 29日	住民説明会(桂島・石浜・野々島地区)					
	11月30日			第4回復興交付金事業計画において事業採択(桂島・寒風沢地区)		第4回復興交付金事業計画において事業採択(朴島地区)	
	12月2日	住民説明会(寒風沢地区)					
H25	1月18日					浦戸諸島に係る災害公営住宅整備推進に向けた覚書締結(UR)	
	2月4日	住民懇談会(桂島地区)					
	2月5日	住民懇談会(野々島・寒風沢地区)					
	3月26日		工事着手(寒風沢地区)				
	4月17日 ~22日	住民懇談会(桂島・石浜・野々島・寒風沢地区)					
	7月18日	住民説明会(野々島・寒風沢・朴島地区)					
	7月19日	住民説明会(桂島・寒風沢地区)					
	8月22日			工事着手(桂島・寒風沢地区)			
	9月20日		工事着手(野々島地区)				
	9月30日					建設をURに要請(桂島・野々島・寒風沢・朴島地区)	
	12月26日						浮棧橋完成(寒風沢地区)
H26	3月27日	漁業集落防災機能強化事業工事着手(桂島・野々島・寒風沢地区)					
	3月28日						野々島漁港-中防波堤完成(災害復旧)
	6月10日				工事着手(朴島)		
	9月19日						野々島漁港-1m物揚場船揚場完成
H27	2月末					桂島地区(I期)完成(予定)	
	3月上			平成27年度中工事完了予定(桂島・寒風沢地区)		野々島地区完成(予定)	

▶ 漁業集落防災機能強化事業 (桂島・石浜・野々島・寒風沢地区)

▶ 小規模住宅地区改良事業 (朴島地区)

災害公営住宅へのアクセス道となる集落道や、津波発生時に住民や観光客が速やかに高台へ避難するための避難路を整備します。

住民の方々との意見交換や県事業との調整を行いながら、平成25年度までに調査を終え、26年度から集落道や避難路の工事に着手しています。



整備が急がれる集落道（寒風沢）

〈スケジュール（漁業集落防災機能強化事業）〉

平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度 ※一部繰越
● 事業採択		● 工事着手		

▶ 漁港施設機能強化事業 (野々島・寒風沢地区)

▶ 漁港施設災害復旧事業 (野々島・寒風沢地区)

浦戸地区の基幹産業である浅海漁業の復興を目指し、拠点となる漁港施設（防波堤、物揚場、船揚場、浮棧橋）の復旧工事と、漁港のかさ上げ工事を行っています。

地盤沈下が著しい浦戸地区では、満潮時に漁港施設が冠水する状況が続いており、一日も早い完成を目指して工事を進めています。



工事が進む漁港施設（野々島）



浮棧橋の完成式（寒風沢）

▶ 浦戸地区集落再生促進施設整備事業（桂島・寒風沢地区）

震災で甚大な被害を受け、人口減少が著しい浦戸地区の集落再生と、これからの島づくりの担い手確保を目指し、寒風沢と桂島の旧浦戸第一、第二小学校を改修して「浦戸ステイ・ステーション（仮称）」を整備します。

校舎の1階には住民交流のための多目的室や炊き出し拠点（厨房）、浴室などを、2階には就漁希望者などの宿泊施設6室を設け、Jターンなどによる新たな就漁希望者が宿泊できる施設や、地域住民の交流施設、災害時の防災避難施設として活用します。

現在整備を進めており、平成27年度中のオープンを目指しています。



「浦戸ステイ・ステーション（仮称）」に生まれ変わる旧浦戸第二小学校（桂島）

浦戸地区の復旧・復興事業

▶ 災害公営住宅整備事業

桂島・野々島・寒風沢・朴島の4カ所に合計45戸整備します。

桂島地区

●計画敷地 (㎡)
5,436

●戸数
5棟14戸
木造1～2階建て長屋12戸
木造平屋建て戸建2戸



〈スケジュール〉

平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
	●	●	●	●
	事業採択	事業要請	建築工事着手	完成予定(1期)
				完成予定(2期)

寒風沢地区

●計画敷地 (㎡)
7,762

●戸数
7棟11戸
木造平屋建て長屋5戸
木造平屋建て戸建6戸



〈スケジュール〉

平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
	●	●	●	●
	事業採択	事業要請	建築工事着手	完成予定

野々島地区

●計画敷地 (㎡)
1,930

●戸数
2棟15戸
木造2階建て共同8戸
木造2階建て共同7戸



〈スケジュール〉

平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
	●	●	●	●
	事業採択	事業要請	建築工事着手	完成予定

朴島地区

●計画敷地 (㎡)
1,796

●戸数
戸数/3棟5戸
木造平屋建て長屋4戸
木造平屋建て戸建1戸



〈スケジュール〉

平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
	●	●	●	●
	事業採択	事業要請	建築工事着手	完成予定

▶ 防災集団移転促進事業

桂島・寒風沢島の一部では、浸水被害が大きかったことから、高台に造成する団地に災害公営住宅の整備とあわせ集団移転を行います。

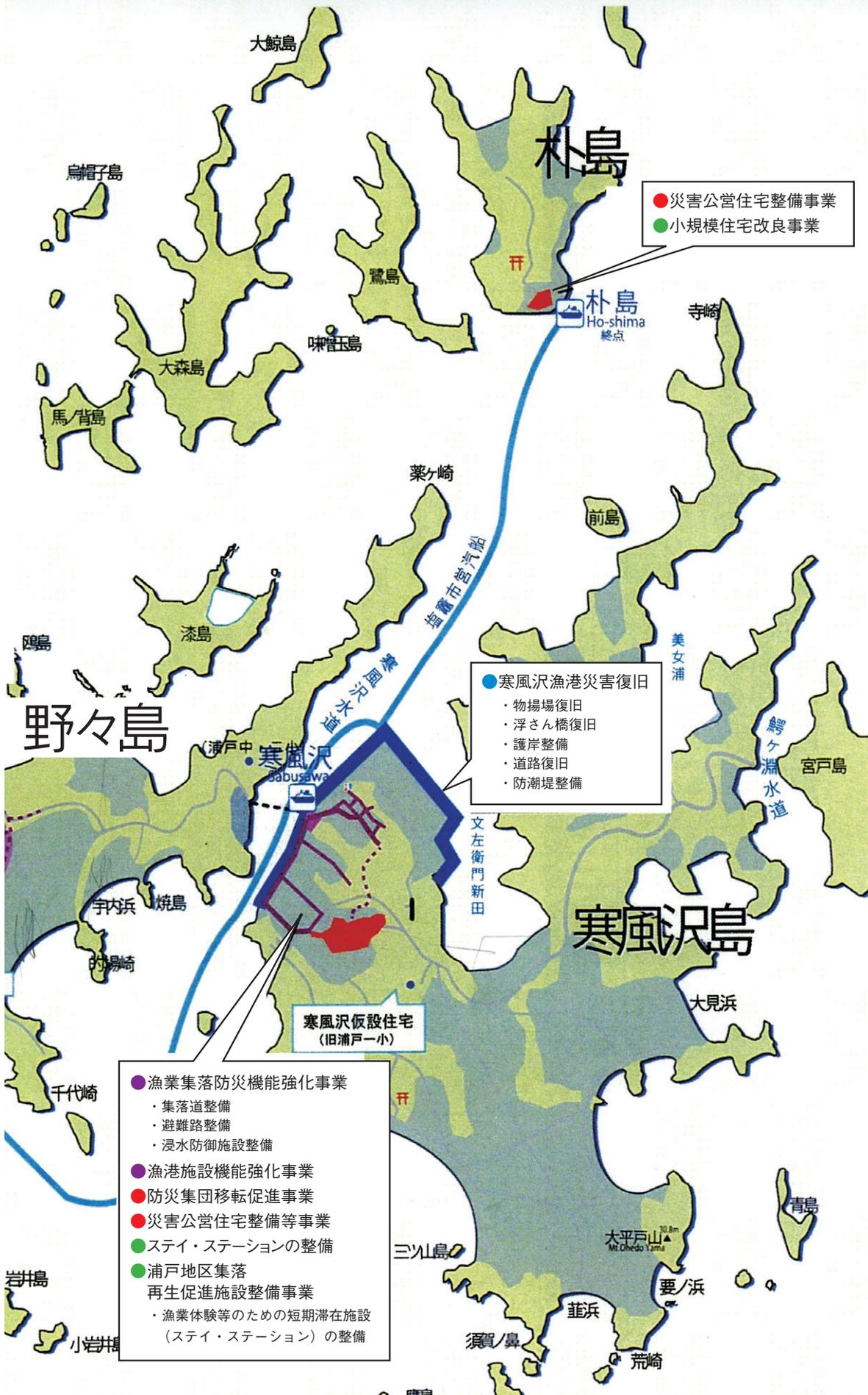
防災集団移転促進事業では、移転促進区域内の住宅70戸(桂島35戸、寒風沢35戸)のうち、25戸(桂島13戸、寒風沢12戸)が新たに造成する高台の住宅団地や災害公営住宅に移転します。

■ 防災集団移転促進事業の概要

	移転促進区域		住宅団地	
	面積(ha)	住宅戸数(戸)	面積(ha)	移転戸数(戸)
桂島	2.5	35	0.5	13
寒風沢	2.1	35	0.8	12
合計	4.6	70	1.3	25

〈スケジュール〉

平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
	●	●		●
	事業認可	事業採択	工事着手	工事完了予定



▶ 浦戸地区の復旧・復興事業 概要

〈浦戸・桂島地区〉



〈浦戸・野々島地区〉



〈浦戸・寒風沢地区〉



〈浦戸・朴島地区〉



(イメージバース)

● 漁業集落防災機能強化事業

- ・ 集落道整備
- ・ 避難路整備
- ・ 浸水防御施設整備

● 漁港施設機能強化事業

- ・ 災害公営住宅整備等事業

● 野々島漁港災害復旧

- ・ 物揚場復旧
- ・ 浮さん橋復旧
- ・ 道路復旧
- ・ 防潮堤整備

● 同報系防災行政無線設備設置

- ・ デジタル化更新、監視カメラ設置

● 浦戸消防団第一分団器具置場

- ・ 復旧

● 休憩所整備

- ・ うらとラウンジ「菜の花」

… 津波による浸水箇所

● 防災集団移転促進事業

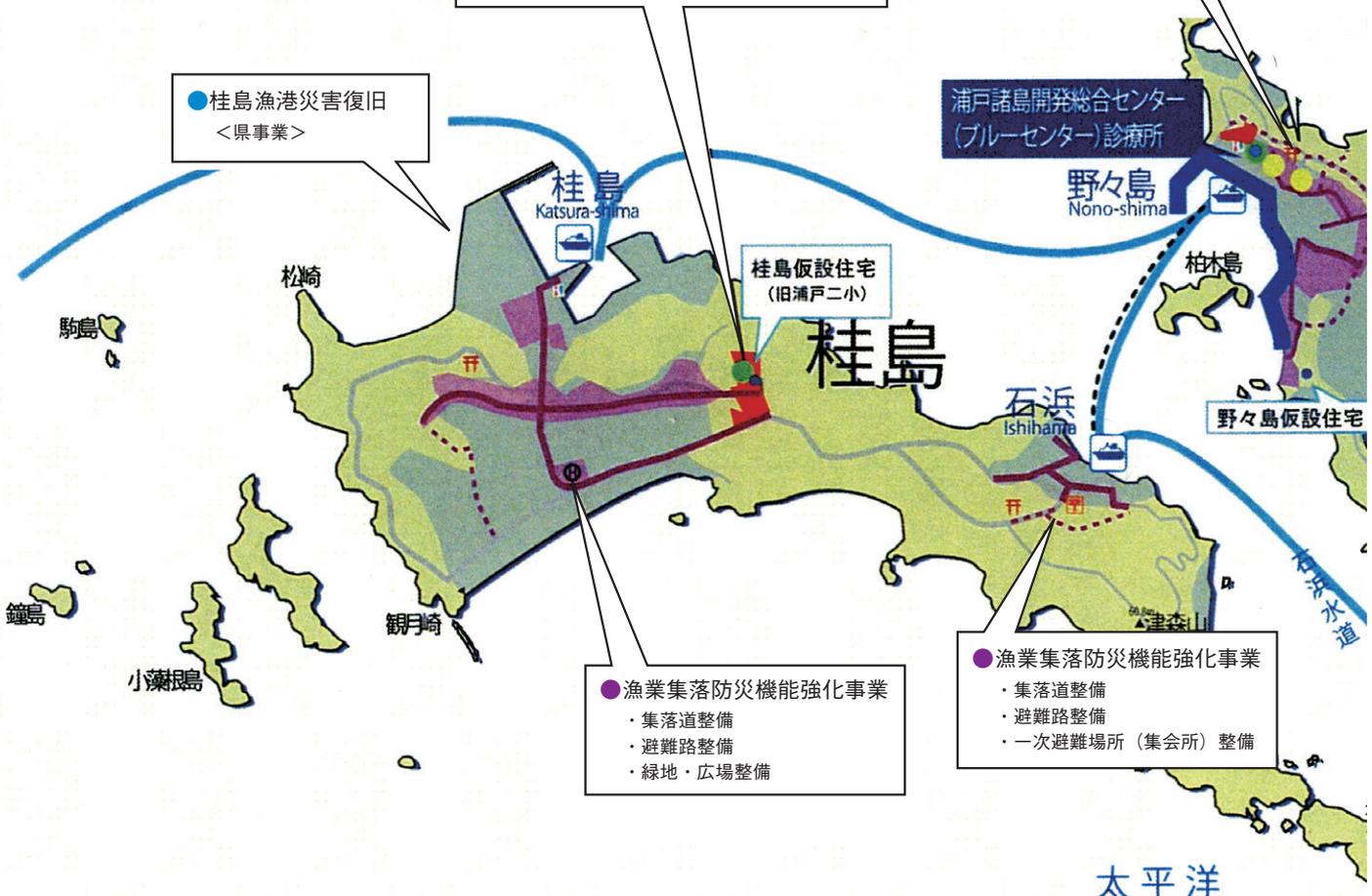
● 災害公営住宅整備等事業

● 浦戸地区集落再生促進施設整備事業

- ・ 漁業体験等のための短期滞在施設 (ステイ・ステーション) の整備

● 桂島漁港災害復旧

< 県事業 >



浦戸諸島開発総合センター
(ブルーセンター) 診療所

● 漁業集落防災機能強化事業

- ・ 集落道整備
- ・ 避難路整備
- ・ 緑地・広場整備

● 漁業集落防災機能強化事業

- ・ 集落道整備
- ・ 避難路整備
- ・ 一次避難場所 (集会所) 整備